

■ 提 言 ■

臨床研究の勧め

藤田保健衛生大学小児科 浅野喜造

小児科医として主に大学に勤務し 30 年を超えた。この間、診療、研究、学事に携ってきたが、この長きにわたって面白いことばかりではなく、むしろ、辛く感じることの多いといわざるを得ない仕事を続けることができた理由は何であろうか。学生時代の不勉強のため卒業してからは何か本当の仕事をしなればという切実な思いがスタートであった気がする。名古屋市にある社会保険中京病院の小児科医であった 1970 年代初頭、小児科臨床では感染症が花盛りであった。それらのなかで、多くの患児が罹患し、臨床像がはっきりしており、ポピュラーな疾患の割にはわかっていないことの多い水痘を臨床研究の対象とした。目の前を当たり前のように過ぎていく日常疾患のなかで不明点は多々あるものの、日常的すぎて世界的にあまり調べられていないものを対象としたわけであった。その当時、阪大微研の高橋理明先生が水痘ワクチンの開発を開始されており、同ワクチン臨床研究の一翼を担うことができた。同病院小児病棟で水痘患者が発生した際、水痘ワクチンを緊急接種し水痘の院内流行を阻止できたクリアカットな成績を 1974 年の Lancet に公表することができた。研究を開始し没頭しているとだんだん面白くなってくるものである。水痘の感染病理、診断、治療、予防に関する成績が徐々に世界の一流誌に公表されるようになり、それらは大きな喜びにつながっていった。こうなれば臨床研究が面白くて仕方がなくなり、多少辛いことも苦しいことも問題では

なくなり、切れ目なく継続できるようになるのであろう。この面白さが大切である。

もう一度訪れたチャンスは 1980 年代後半であった。当時、小児科領域で原因不明の大物 common disease は川崎病と突発性発疹症であった。両疾患の原因解明に向け準備を整えつつあった。そのときは、2 度目の FDA 勤務後で、AIDS の猿を用いた疾患モデルを作る仕事でリンパ球からウイルス分離することを行っていたため、この技術が役立った。そして 1988 年には突発疹の原因が HHV6 であることを示す成績を大阪大学の山西弘一先生らと Lancet に公表することができた。その後の HHV6 初感染と臓器移植と HHV6 再活性化に関する臨床的、ウイルス学的研究成績の多くを一流英文誌に公表することができ、誰よりも早く研究に着手することの重要性を再び学ぶことができた。

わくわくするような気持ちをもちながら研究成果の公表を継続するには研究計画立案が大切である。その実現には子どもたちの親と心が触れ合うことが大切であり、研究計画に積極的に参加してもらうことが鍵になる。常日頃から頻繁に、詳細に、親切に子どもたちを診て、正確に、客観的に記録をし、仮説に合致するか論理的に考察し、何らかの結論を導き出す臨床研究の一連の流れは、まさに質の高い小児科臨床そのものである。またこのような真剣な姿勢は親の気持ちにも通じ、新知見を得るべく正の循環として機能するものである。

* * *